

2020年11月8日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

エゼキエル書 36 : 22～24

ルカによる福音書 11 : 2

「御国が来ますように」

<主の祈り>

イエスさまが「主の祈り」を教えてくださいました。イエスさまがご自分の弟子に、教えられた祈りです。イエスさまが、教会に、わたしたちに、教えてくださいました祈りです。

前回わたしたちは、祈りの一言目、神さまへの呼びかけの言葉、「父よ」に注目しました。わたしたちが、神さまを「父よ」と親しく呼ぶことがゆるされていること。イエスさまがご自分の救いの御業を通して、わたしたちを神さまの許へと招いて下さり、神さまの子どもとして下さる。そのゆえに、罪人であるわたしたちも、罪を赦され、子どもとして、「父よ」と呼びかけて祈ることができるのだということ。この「主の祈り」を通して、イエスさまが、わたしたちを、神さまへの深い信頼と親しい交わりへ呼んで下さっているということ。そのことを聞いてきました。

わたしたちは、この神さまとの親しい交わりの中で、主の祈りを祈っていきます。

今日は、ルカによる福音書に示されている、第一の祈り「御名が崇められますように」と、第二の祈り「御国が来ますように」について、教えられたいと思います。

「主の祈り」はマタイによる福音書 6 章にもあり、第三の祈りとして「御心が行われますように、天におけるように地の上にも」という祈りがありますが、ルカにはその祈りは語られていません。

さて、主の祈りは、前半と後半に分かれていると言われます。ルカにおいては、この 2 節に語られている第一と第二の祈りが前半、そして、3～4 節にある第三、第四、第五の祈りが後半です。

前半は、神さまについてのこと、後半は、わたしたち人間についてのことだと言われます。この構造は、十戒ともよく似ています。十戒も、前半は神さまに関する事、後半はわたしたちに関する事となっています。

今日は、神さまに関する前半の祈りの部分です。もしかすると、神さまに対して、神さまのことを祈る必要があるのだろうか、と思われる方がいるかも知れません。でも、この祈りは大切なことで、神さまにまつわる祈りは、わたしたちのための祈りとなるのです。

神さまは、わたしたちをお造りになり、この世界を支配しておられるお方です。それはつまり、わたしたちが、この神さまによって生かされているのであり、支えられているのだということです。ですからわたしたちは、祈りにおいて、自分の願いより、まず神さまのこと

を祈らなければなりません。神さまがわたしたちの神であって下さること、神さまがまことの神であられることが、わたしたちを生かし、救い、支えることになるのです。

<第一の祈り 御名が崇められますように>

さて、イエスさまが、一番にこのことを祈りなさいと教えて下さったのが「御名が崇められますように」との祈りです。わたしたちが唱和している「主の祈り」では、「願わくはみ名をあがめさせたまえ」となっています。

わたしたちは、このことをどういう内容だと思っているのでしょうか。そのままだと、「わたしたちが、神さまのお名前を崇めますように」と受け取るでしょう。

しかし、正確にここを訳すなら、本来の意味は「あなたの名が聖とされますように」となります。神さまの御名とは、神さまご自身を現します。名前は単なる記号ではありません。名が唱えられるところに、神さまご自身がおられ、御業を行ない、働かれます。その実体を表すのが「名前」なのです。

そして、「聖とする」とは、「聖別される」「特別に取り分けられる」ということです。神さまと人間が混同されず、神が神であられること。それが聖とされている、ということです。

まず、神さまの御名についてですが、神さまは、匿名の神さまではありません。匿名というのは、ある意味で無責任なことです。誰か特定できない。責任を問われないのです。もちろん神さまは、御自分の名をお示しにならないことも出来ました。でも、神さまは、わたしたち人間に御自分の名を示し、御自身をわたしたちに現わして下さいました。そして、御自分のなさること、語られること、働かれることすべてに忠実でいて下さり、すべての責任を負って下さるのです。

神さまは、御自分の御名を、わたしたちに示されました。わたしたちが神さまを好きに名付けたものではありません。旧約聖書では、神さまはお名前を尋ねたモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」とご自身の名を示されました（出エジプト 3：13～14）。また、イエスさまはこの神さまが「父」と呼ばれる方であると教えて下さいました。また、神さまは「インマヌエル」、神は我々と共におられる（マタイ 1：2）という名前を示されました。それが、神さまというお方です。

こうして、ご自分の聖なる御名を教えて下さった神さまが、まことの神とされること。聖なる方でいて下さること。御名が聖とされること。それが、わたしたちの第一の祈りです。

しかし、元々、神さまの御名は聖なるものではないのでしょうか。それなのに、なぜこのことを祈らなければならないのでしょうか。

聖なる名を、神さまがご自分から明かして下さいること、公に知らせて下さることとは、わたしたち人間が、その聖い特別なお名前を口にすること、用いることを許して下さいとい

うことです。しかしそれは、神さまにとって大変な苦難と忍耐を必要とすることでした。

なぜなら、わたしたちは神さまのお名前を、自分の願望のためにみだりに唱えたり、神さまのお名前を悪用したりして、聖なる名前を汚してしまうからです。特別に聖いお名前を、わたしたちの汚い手によって引きずり降ろしてしまうからです。神を神とせず、神の御名を聖とせず、自分の名を高めようとするからです。

もちろん、神さまはそのことをご存知でした。罪に陥っているわたしたちが、神さまの御名を知った時に、御名を正しく呼ぶことをせず、悪用し、汚してしまい、神さまを傷つけることになるということ。

しかしそれでも、神さまは御自分の御名を表すことを決断して下さったのです。聖さを保って、わたしたちと遠く離れたところにおられるよりも、汚れたわたしたちの中に身を投じて下さり、御自分の名を示し、わたしたちに御自分の存在を表し、共にいることを教えるために、約束するために、喜んでご自分の名を現わして下さったのです。

御自分の名の聖さにもまして、わたしたちを愛して下さり、憐れんで下さり、共にいることを願って下さったのです。

この神さまの御心とは裏腹に、神さまに背き、逆らい、離れて、神さまに対して罪を犯し、神さまの聖なる御名を汚しているわたしたちです。

わたしたちは、汚してしまった神さまのお名前を、わたしたちの汚れた手で聖くすることなど出来ません。神さまが、聖くあられるのは、神さまご自身によるのです。

そして、神さまが御自分の名を聖くされるとは、神さまの名を汚したわたしたちの罪が正しく裁かれるということなのです。わたしたちは、本来この祈りを祈るなら、神さまの聖さの前で、自分の罪のために、滅びなければならない者なのです。

しかし、神さまはそれでもなお、わたしたちが滅びないで、共に生きる者となることを望んで下さいました。そのために、わたしたちが罪のために受けるべき裁きを、すべて神の御子イエスさまに負わせられたのです。そのために、御子イエスさまは、まことの人となって世に来て下さったのです。

イエスさまは、この「主の祈り」を教えた後に、神さまの御名を汚したすべての人間のために御自分が代わりに裁きを受け、わたしたちの罪と滅びの死を引き受け、十字架へと向かって下さいました。そうして、神の御子イエスさまの十字架の死によって、わたしたちの罪は贖われ、わたしたちが汚した神さまの御名は、聖とされたのです。

「御名が聖とされますように」。「御名が崇められますように」。この祈りは、イエスさまの十字架の救いによって実現する祈りなのです。聖なる神を、「父よ」と呼ぶことができる恵みの中で、はじめて祈ることが出来る祈りなのです。これは、神さまがわたしたちの罪を赦し、救って下さり、わたしたちの神でいて下さることを求める祈りなのです。

ですから、この第一の祈りを祈る時、わたしたちは、神さまの御心に立ち帰らなければな

りません。神さまがわたしたちを愛して下さり、憐れんで下さり、共にいて下さるために、御名を現わして下さったこと。イエスさまがわたしたちの罪と滅びをすべて担って下さり、御名を聖として下さったことを思い起こし、感謝と喜びをもって、神さまを崇め、礼拝するのです。

それでも、わたしたちは日々、神さまの名を汚してしまいます。神を神とせず、罪の中を歩もうとしてしまいます。そしていまだ、神さまの御心を、神さまの聖さを知らない人々が沢山います。

だから今日も、毎日、わたしたちは「御名が聖とされますように」と祈り、願い求めるのです。イエスさまの十字架の下で、神の聖くされた御名の下で、わたしたちが神さまの御心に従って日々を歩むことが出来ますように。神さまの御名を、すべての者が知り、その聖い御名を礼拝しますように。

神さまの御名が完全に聖くされ、神さまのご支配が完全に現されるのは、イエスさまが再び来られる日、終わりの日です。その日を待ち望みつつ、祈るのです。

「御名が崇められますように」。「御名が聖とされますように」。これが、わたしたちが第一に祈るべきことなのです。

<第二の祈り 御国が来ますように>

そして、第二の祈りが「御国が来ますように」です。

御国とは、神の国のことであり、神のご支配という意味です。神さまのご支配が実現しますように、と祈っています。

さてしかし、この世は、そしてわたしたちは、はじめから造られた神さまのものであり、もともと神さまのご支配のもとにあったのではないのでしょうか。

確かにそうです。しかし、そうであるにも関わらず、わたしたちは神さまに従うことを拒み、自分が、自分自身や世界を支配することを望みました。神さまの願いの実現より、自分の願いや欲望の実現を求めました。わたしたちは罪によって、自ら神さまのご支配を拒否し、苦しみや悩み、そして滅びへと向かっていったのです。

そして、わたしたちが神さまのご支配を拒むこと、神さまとの正しい関係を壊すことは、わたしたちの隣人関係をも壊しました。またこの地上の管理すべきものも、正しく治めることが出来なくなりました。そしてわたしたちは神さまから遠ざかり、「神さまに見捨てられた」と叫ぶ者となったのです。

しかし、このわたしたちを救うために、神さまが、御自分の命と恵みのご支配へと招いて下さるために、イエスさまが来て下さいました。

イエスさまが、この地上での宣教で一番はじめに語られたことは、「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」との御言葉でした。

イエスさまが来て下さり、イエスさまが共にいて下さり、わたしたちを罪と死の支配から解放して下さいました。そして、神の命のご支配の中に入れて下さる。イエスさまが来られた時、

神さまのご支配がわたしたちに実現する。イエスさまは、このことを告げて下さったのです。

そして、イエスさまは罪と死に捕らわれたわたしたちの叫びを、御自分の身に引き受けて下さいました。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」この苦難の叫びを、絶望の叫びを、イエスさまがわたしたちの代わりに、叫んで下さったのです。

このイエスさまの十字架と復活の御業によって、わたしたちは罪と死の支配から、確かに神さまの恵みと命のご支配に入ることがゆるされるようになったのです。イエスさまの罪の赦しと復活の命を信じることによって、わたしたちは、神さまとの和解が与えられ、いつでも神の国に入ることが出来るようにされたのです。

しかし、これは自動的に与えられるものではありません。神さまは、このご支配をわたしたちが受け入れ、信じることを求めておられます。わたしたちがイエスさまの救いを信じ、神の国を受け入れた時に、御国は来た、わたしは神のご支配の中にいる、とすることが出来るのです。

神さまの恵みは、救いは、一方的に与えられました。神の国、神のご支配は、わたしたちが実現するのではなく、神さまが実現し、来たらせて下さるものです。

しかし、それは人間の意志に関係なく、強制的になされるような支配ではありません。

そのご支配は、神の御子が貧しくなられ、弱い者、罪人と共にあり、十字架に至るまで父なる神に従順となられることで実現したご支配です。わたしたちは、このイエスさまを受け入れることで、神さまのご支配を受け入れます。

神さまは、罪を赦されたわたしたちが、神さまに立ち帰って、慰められて、癒されて、そして心からの喜びと感謝をもって、神さまのご支配に従うことを望んでおられるのです。

ですから、神の国は、わたしたちに信じることを求めます。イエスさまが十字架に架かって罪を贖って下さった。復活して、わたしたちに新しい命と復活の約束を与えて下さった。あなたはこれを信じるか。あなたは、神のご支配を受け入れるか。神さまのものとなること、神さまの子どもとされることを、あなたは望むか。そう問われます。わたしたちはこれに答えなければなりません。

そして、これを信じ、受け入れ、望む時に、わたしたちは洗礼を受け、神の国に属する者となります。「御国が来ますように」とは、この信仰を求める祈りなのです。

神の国は、イエスさまの救いの御業によって、すでに来ています。すでに実現している神の国を、神のご支配を、わたしたちが、そしてすべての人が知らされ、信じ、受け入れるように。そのことを祈る、祈りなのです。

そして、日々、神の国を喜んで生きること。神さまのご支配に従順に歩み、神さまに属する者として感謝と喜びの生活をするを、祈り求めていくのです。

わたしたちが神さまのものであるなら、わたしたちの人生、生活、日々のすべてもまた、神さまのものであるはずです。わたしたちが、今置かれている場所で、生活しているところ

で、働いているところで、出かけるところで、人と関わるところで、誰かと語り合うところで。今日も、神さまのものとして。毎日、神さまのために。この時も、神の御国のために、生きているのです。

何も出来ない。何もしていない。そう感じることもあるかも知れません。しかし、わたしたちは、自分が神のものであると知っていることによって、この祈りを心から祈ることによって、神の国の中を、確かに歩んでいるのです。そして、この祈りに導かれる日々は、確かに神さまのご支配に従う、神さまに喜ばれる歩みとされるのです。

「御国が来ますように」。わたしたちは祈る度に、このことを確認します。

わたしたちは、つつい、気付けば自分の国を求めています。自分のために生きようとしてしまいます。でも、この祈りによって、神さまのご支配の中にあることを新たにされ、そして、神さまの御心に従う歩みを求めるのです。「御国が来ますように。」

そして、終わりの日に、神さまの御国が完成する。神さまのご支配が、完全に、すべての者に及ぶ。その日を、待ち望むのです。

未だ世には、神さまに逆らう者がおり、罪が満ち、悪があり、死が力を振るっているように見えます。わたしたちは、それらの支配に目を奪われて、神さまのご支配を見失いそうになることがあります。これらの力は、確かにわたしたちよりも強い力を持っています。

しかし、イエスさまは、もっと強いのです。罪にも、悪にも、死にも、確かに勝利を収めておられます。すでに、御国は来ているのです。

ですから、イエスさまが再び来られる日、その勝利が完全に現される日が来ることを待って、神のご支配が完成する日を信じて、わたしたちは祈り続けます。

この祈りによって、わたしたちは、苦難や悲しみの中でも、御国の中にいることを確かにされ、また御国の完成を待ち望むことが出来ます。この祈りによって、わたしたちは希望を与えられ、それによって、現実の苦しみを耐え忍ぶ力が与えられるのです。

御名が聖とされますように。御国が来ますように。わたしたちは祈りましょう。

救いを実現して下さいますように。信仰が与えられますように。あなたの御心に従うことが出来ますように。キリストがまことの支配者であることを、見つめることが出来ますように。そしてすべての者があなたを礼拝し、地上のすべてに神さまのご支配が及びますように。

そして、わたしの今日の歩みが、父なるあなたと共にあり、あなたのためのものでありますように。この祈りをわたしが祈ることを、あなたが喜んで下さいますように。

【お祈り】

天の父なる神さま、父よ

主の祈りを与えられている恵みを感謝いたします。

わたしたちが祈る度に、あなたの御心を思い起こしますように。愛と憐れみに立ち帰り、救いの恵みに与っていること、そして御国の完成の希望を与えられていることを、確かにして下さい。

御名を聖くするために、わたしたちの罪を担って下さったイエスさまを信じ、その恵みのご支配を感謝して受け入れ、喜んで従っていく者となる事が出来るようにして下さい。

そして、すべての人が、この主の祈りを祈る者とされますように。わたしたちも主のものとして、神の国の民として、あなたの御業に従い、人々のあなたの恵みを伝え、日々のすべてを神さまのご栄光を現わす歩みと出来ますように。

御名が崇められますように。御国が来ますように。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン